The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Effectiveness of Child-Directed Interaction Training for Young Japanese Children with Autism Spectrum Disorders
Author(s)	古川, 心
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/67067
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　古川　心　）	
論文題名	Effectiveness of Child-Directed Interaction Training for Young Japanese Children with Autism Spectrum Disorders (日本における自閉スペクトラム症児へのChild-Directed Interaction Trainingの効果)

論文内容の要旨

【問題と目的】

Parent-Child Interaction Therapy (PCIT)とは、2〜7歳の子どもとその親を対象とする行動療法であり、親子間の豊かな相互交流や安定した関係構築を目指すCDI (Child Directed Interaction)、親が効果的なしつけの方法を学ぶPDI (Parent Directed Interaction)の二段階で構成され、子どもの問題行動や親の育児困難の改善に効果があるとされる(Eyberg et al,1980)。自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorders: ASD)児は、対人相互作用における質的障害を有するため(American Psychiatric Association, 2013)、コミュニケーションスキルの発達において大きな役割を果たすJoint attentionおよびImitation behaviorsのスキル獲得によって、認知面や情動面、言語面の発達を促しうると考えられる (Baron-Cohen, 1989; Melzoff, & Gopnik, 1993)。そこで本研究では、ASD児を対象に、母親からのJoint attentionやImitation behaviorsを促す関わりに特化したCDI Training (CDIT)を実施し、子どもの社会性、更には問題行動、親のストレスや親子の相互交流における効果を検証した。

【方法および結果】

大阪大学医学部附属病院小児科発達外来通院中のASDの診断を受けた子ども（4〜7歳)とその母親21組を対象とした。対象をImmediate Treatment (IT)群とWaitlist (WL) control 群に分け、子どもの適切行動を促す関わり方のスキルの教示（teaching session： 1回）、親子遊び場面を通したスキルの練習（coaching session： 7回）から成るCDIT（全8回）を実施した。特に、coaching sessionでは、対人相互作用の改善を目的とし、Joint attentionとImitation behaviorsを促す母親からの働きかけに焦点づけて実施した。評価指標として、以下のものを用いた。(1)子どもの変化①子どもの社会性：Social Responsiveness Scale (SRS；神尾ら, 2009）、②子どもの問題行動の頻度：Eyberg Child Behavior Inventory (ECBI;加茂ら, 2010）のIntensity Scale、(2)親の変化　①子どもの問題行動に対する親のストレス：ECBIのProblem Scale、②親の育児ストレス : Parenting Stress Index(PSI;兼松ら, 2013)、(3)親子の相互交流の変化 : Dyadic Parent-Child Interaction Coding System-Ⅲ (DPICS-Ⅲ;加茂ら, 2010)、(4)母親へのインタビュー(「子どもの行動の変化について」、「CDITスキルの使用に関連した変化について」、「親子の相互交流の変化について」聴取)。SRS、ECBI、PSIは、実施前後でIT群とWL群に実施、ANCOVAを用いた分析を行った。DPICS-Ⅲはt-test、母親へのインタビューはKJ法(川喜田,1967)を用いて分析、いずれもIT群にのみ実施した。

結果、(1)子どもの変化①SRS Cognition scaleにおいて、IT群の方がWL群より低い値となり、子どもの社会性の改善が示唆された(F (1, 19) = 1.47, p = .24, d = 1.30)。また、②ECBI Intensity scaleで、IT群がWL群に比べ子どもの問題行動が有意に減少した(F (1, 19) = 16.26, p = .001, d = 1.79)。(2)親の変化①ECBI Problem scaleでは、IT群の方がWL群に比して有意に減少し、子どもの問題行動に対する親のストレスの減少が示された(F (1, 19) = 6.71, p = .018, d = 0.91)。また、②PSIでは、3つの下位項目「Sensitive to Stimuli：適応性の問題(F (1, 19) = 5.48, p = .031, d = 0.53)」、「Spouse：配偶者との関係(F (1, 19) = 9.68, p = .006, d = 0.64)」、「Competence：親としての役割(F (1, 19) = 3.91, p = .063, d = 0.93)」に関するストレスにおいて、IT群の方がWL群に比べ、改善したことが示唆された。更に、(3)親子の相互交流の変化では、DPICS-Ⅲを用いた行動評価の結果、実施前後で母親の肯定的な関わりが有意に増加(t(19) = 6.44, p < .001)、否定的な関わりが有意な減少を示し(t(19) = 6.59, p < .001)、その改善が示された。また、(4)母親へのインタビュー分析から、上記の尺度の数値的変化を支持する結果が得られた。

【総括】CDITにおいて、特にJoint attentionやImitation behaviorsを促し、強化する働きかけは、ASD児の社会性の改善、問題行動減少・適応行動の増加、および親の育児ストレスの減少に影響を与えた。また、行動観察や母親からのインタビューでは、親子の相互交流への改善がみられた。以上より、本邦におけるASD児とその親への支援方法としてCDITの有効性が示された。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　古川　心　）		
論文審査担当者	（職）	氏　　名
	主　査　　教　授	片　山　泰　一
	副　査　　教　授	友　田　明　美
	副　査　　教　授	清　水　栄　司

論文審査の結果の要旨

論文内容の要旨

【問題と目的】

Parent-Child Interaction Therapy(PCIT)とは、2～7歳の子どもとその親を対象とする行動療法であり、親子間の豊かな相互交流や安定した関係構築を目指すCDI (Child Directed Interaction)、親が効果的なしつけの方法を学ぶPDI(Parent Directed Interaction)の二段階で構成され、子どもの問題行動や親の育児困難の改善に効果があるとされる(Eyberg et al,1980)。自閉スペクトラム症(Autism Spectrum Disorders: ASD)児は、対人相互作用における質的障害を有するため(American Psychiatric Association, 2013)、コミュニケーションスキルの発達において大きな役割を果たすJoint attentionおよびImitation behaviorsのスキル獲得によって、認知面や情動面、言語面の発達を促しうると考えられる (Baron-Cohen, 1989; Melzoff, & Gopnik, 1993)。そこで本研究では、ASD児を対象に、母親からのJoint attentionやImitation behaviorsを促す関わりに特化したCDI Training(CDIT)を実施し、子どもの社会性、更には問題行動、親のストレスや親子の相互交流における効果を検証した。

【方法および結果】

大阪大学医学部附属病院小児科発達外来通院中のASDの診断を受けた子ども（4～7歳)とその母親21組を対象とした。対象をImmediate Treatment (IT)群とWaitlist (WL) control 群に分け、子どもの適切行動を促す関わり方のスキルの教示（teaching session：1回）、親子遊び場面を通したスキルの練習（coaching session：7回）から成るCDIT（全8回）を実施した。特に、coaching sessionでは、対人相互作用の改善を目的とし、Joint attentionとImitation behaviorsを促す母親からの働きかけに焦点づけて実施した。

評価指標として、以下のものを用いた。(1)子どもの変化①子どもの社会性：Social Responsiveness Scale(SRS；神尾ら, 2009）、②子どもの問題行動の頻度：Eyberg Child Behavior Inventory (ECBI;加茂ら, 2010）のIntensity Scale、(2)親の変化①子どもの問題行動に対する親のストレス：ECBIのProblem Scale、②親の育児ストレス：Parenting Stress Index(PSI;兼松ら, 2013)、(3)親子の相互交流の変化：Dyadic Parent-Child Interaction Coding System-Ⅲ(DPICS-Ⅲ;加茂ら, 2010)、(4)母親へのインタビュー(「子どもの行動の変化について」、「CDITスキルの使用に関連した変化について」、「親子の相互交流の変化について」聴取)。SRS、ECBI、PSIは、実施前後でIT群とWL群に実施、ANCOVAを用いた分析を行った。DPICS-Ⅲはt-test、母親へのインタビューはKJ法(川喜田,1967)を用いて分析、いずれもIT群にのみ実施した。

結果、(1)子どもの変化①SRS Cognition scaleにおいて、IT群の方がWL群より低い値となり、子どもの社会性の改善が示唆された(F (1, 19) = 1.47, p = .24, d = 1.30)。また、②ECBI Intensity scaleで、IT群がWL群に比べ子どもの問題行動が有意に減少した(F (1, 19) = 16.26, p = .001, d = 1.79)。(2)親の変化①ECBI Problem scaleでは、IT群の方がWL群に比して有意に減少し、子どもの問題行動に対する親のストレスの減少が示された(F (1, 19) = 6.71, p = .018, d = 0.91)。また、②PSIでは、3つの下位項目「Sensitive to Stimuli：適応性の問題(F (1, 19) = 5.48, p = .031, d = 0.53)」、「Spouse：配偶者との関係(F (1, 19) = 9.68, p = .006, d = 0.64)」、「Competence：親としての役割(F (1, 19) = 3.91, p = .063, d = 0.93)」に関するストレスにおいて、IT群の方がWL群に比べ、改善したことが示唆された。更に、(3)親子の相互交流の変化では、DPICS-Ⅲを用いた行動評価の結果、実施前後で母親の肯定的な関わりが有意に増加(t (19) = 6.44, p < .001)、否定的な関わりが有意な減少を示し(t (19) = 6.59, p < .001)、その改善が示された。また、(4)母親へのインタビュー分析から、上記の尺度の数値的変化を支持する結果が得られた。

【総括】

CDITにおいて、特にJoint attentionやImitation behaviorsを促し、強化する働きかけは、ASD児の社会性の改善、問題行動減少・適応行動の増加、および親の育児ストレスの減少に影響を与えた。また、行動観察や母親からのインタビューでは、親子の相互交流への改善がみられた。以上より、本邦におけるASD児とその親への支援方法としてCDITの有効性が示された。

本論文に対する評価

本論文は、ASD児の社会性の改善に向け、Joint attentionとImitation behaviorsに焦点をあてたCDITを親子に実施し、子どもの社会性の改善、問題行動の減少・適応行動の増加、および親の育児ストレスの減少、更には親子の相互交流の改善に有効であることを実証した点が高く評価される。また、ASD児が示す他者との社会的なやり取りの困難さにダイレクトにアプローチしたことで、ASD児の社会性の促進、その後の認知面や情動面、言語面の発達促進につながる可能性が期待できる。更に、子どもの問題行動や親のストレスの改善、親子の相互交流の質の向上がみられたことで、ASD児をもつ親への子育て支援に寄与するものとしてもその有効性が示されており評価に値する。このように本邦でのこれまでのASD児とその親に対する行動療法に基づくトレーニングにおいて、上記社会性へのダイレクトなアプローチを実施し、その効果を統計学的に検証した初めての報告であり、本論文は学位の授与に値すると考えられる。